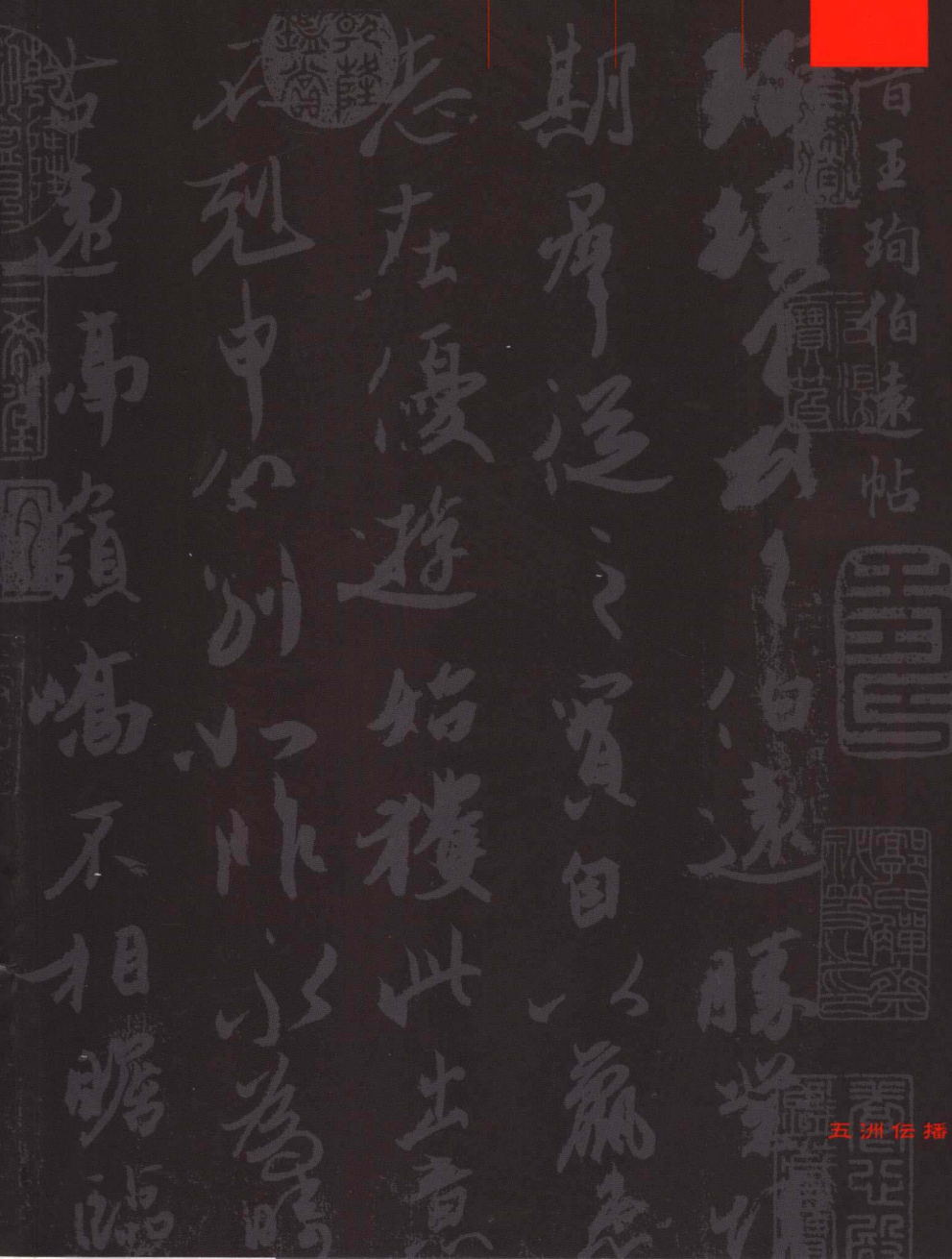


人 文 中 国 シ リ ー ズ

中国書道

陳廷祐 著
張華峰 訳
金海蘭



五洲传播出版社

人 文 中 国 シ リ ー ズ



中国書道

陳廷祐 著
張華峰 訳
金海蘭

江苏工业学院图书馆
藏书章

五洲伝播出版社

图书在版编目 (CIP) 数据

中国书法 / 陈廷祐著; 张华峰, 金海兰译. —北京: 五洲传播出版社, 2004.2

ISBN 7-5085-0421-6

I. 中... II. ①陈...②张...③金... III. 汉字—书法—研究—日文 IV. J292.1

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2004) 第 000753 号

中国书法

著 者 / 陈廷祐

译 者 / 张华峰 金海兰

审 译 / 甲斐千香子

责任编辑 / 邓锦辉

整体设计 / 海 洋

出版发行 / 五洲传播出版社 (北京北三环中路 31 号 邮编: 100088)

承 印 者 / 北京华联印刷有限公司

开 本 / 720 × 965 毫米 1/16

字 数 / 95 千字

印 张 / 8.5

版 次 / 2004 年 2 月第 1 版

印 次 / 2004 年 2 月第 1 次印刷

书 号 / ISBN 7-5085-0421-6/J · 274

定 价 / 62.00 元

目次

書道：中国文化における至宝	1
独特な漢字	13
甲骨文及び金文	23
隸書とその子孫	31
文房四宝	37
線 — 筆力の美	43
結字 — 構築の美	47
布字 — 全体の美	53
書外工夫	59
感情の表出	65

才識の表白 71

情緒、酒神と草書 75

書道と中国人の伝統文化精神 79

父と子：時代の先端を牛耳る 91

唐代の二人の「偉大な」 97

趣意を重んじる三位の大家 101

近代の維新と当代の光輝 107

世界における中国書道 115

付録一：本書で言及した古代中国王朝年表 125

付録二：本書に使われた図版の目次 126

書道：中国文化における至宝

書道は中国の国粹である。古代から今日まで、世界で使用されている文字の種類は千以上にのぼるが、それらの役割はまず記録と伝達にある。人々は字を書くとき美しく書けるように心がけたり、場合によっては需要に応じて芸術的な意味を帯びた花文字や美術字を書いたりするが、多くの文字は独特な芸術まで発展するには至らなかった。漢字は日常の書き以外にある一種の芸術に高められた。書道芸術は中国で盛んに行われ数千年を経ても衰えない。それは絵画、彫刻、詩歌、音楽、舞踊、演劇などと同様に、芸術という分野の一部である。

書道は中国の至る所で行われており、それは中国人の生活に密接に繋がった。愛好者と練習者が尤も多い芸術である。

各地の繁華街では、しばしば有名人自筆の精美な扁額は商店の扉に掲げている。現代的な雰囲気の流れる場所に、古色蒼然とした書道作品を飾ると、その場に幾分の高雅の趣が添えられ落ち着いた気分を醸し出す。

書道作品は居間、書斎、寝室の飾り物である。それ



古い時代の知識人
家庭の居間風景

は吸水性の優れる画仙紙に書き、そして周りに絹を貼り付けてある厚めの紙に表装して掛け軸にするか、或いは、額縁にいれるか、壁に掛けるものである。書かれた内容の大半は主人のお気に入りの、一首の詩詞か、対句か、一言の格言かなどである。仮にその内容が主人自身の作品なら、更にその人の趣味と才能を表すことになる。時として、一幅の書道作品は壁に輝きを持たせ来客を喜ばせる力をもっている。



3

中国最大の伝統

祭日—春節に備える書道

作品は赤い紙に書かれた春聯で

ある。人々はそれを庭園の正門、家屋

の扉、壁或いは柱の上に貼りつけ、至る所

に喜びの雰囲気を漂わせようとする。皆新しい

年に国が安定し民が安らかで、人が健康で作柄が上々

となるよう祈る手段である。

潘伯鷹氏の行書の折扇

精妙な書はなお新聞や書籍の題名に使われる。毎日中国人が手にする人民幣にある「中国人民銀行」の六つの漢字も名人の作品である。盛夏の時、人々はよく扇子を使う、その扇子に貼る紙や絹にも書があり、絵もある。それでおおいで風を送ったり手にとって鑑賞したりして自分の上品さや風流さを見せる。中国人は生まれてから死ぬまで書道ときてもきれいな縁を結んだといっても過言でなからう。赤ん坊が生まれてから初めてのアルバムに年長者たちによって筆で書かれた祝詞があり、新婚の枕カバーには書の「喜喜」（喜という字を二つ横に並べて1字になったもの、装飾に用いる—記者注）が刺



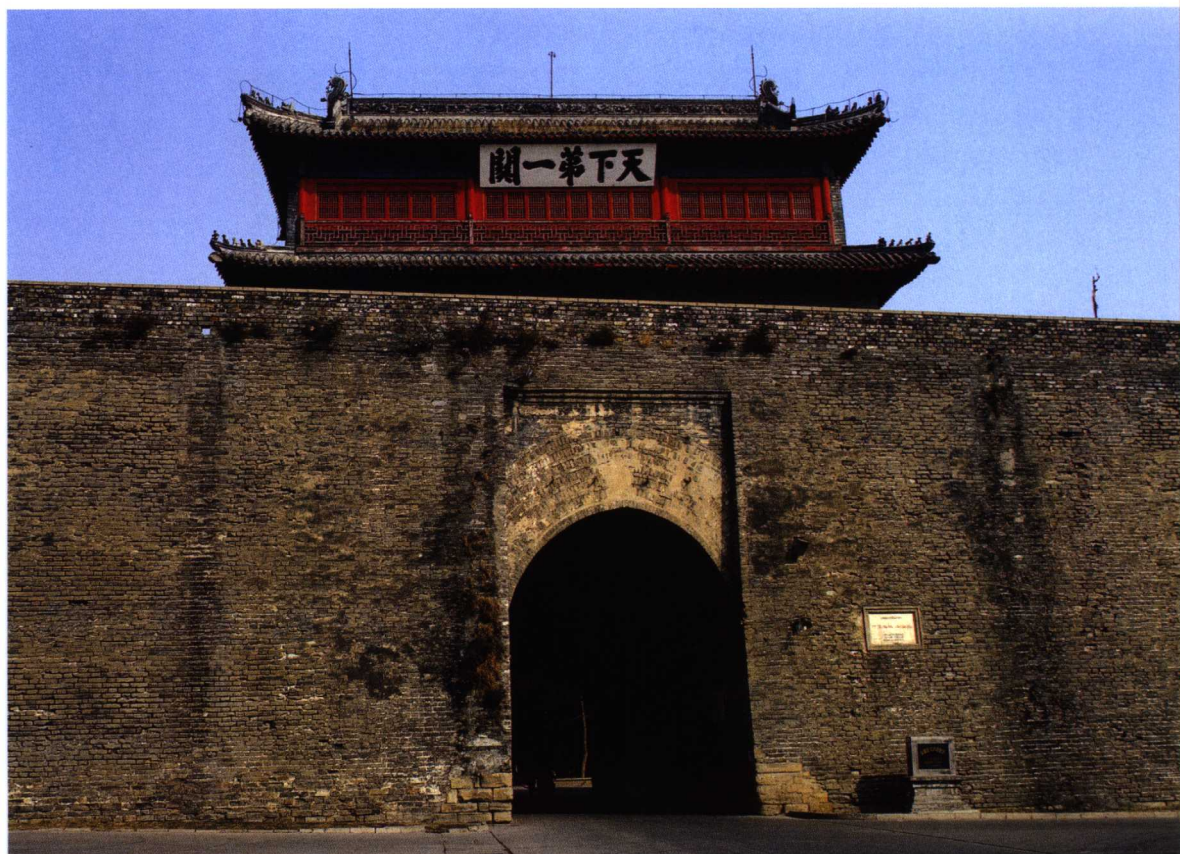
玄関の扉両側に張っている春聯と年画

繡されてある。誕生日の祝いには大きな「寿」の字が家に掲げられる、最後に墓碑の上に刻まれるものも書の達人方による死者の生涯である。

中国への観光客は各地の名所で自然景色、亭台楼閣及び園林風物を飾り付けている書道の佳作をよく見かけるであろう。扁額に書かれ岩石に彫られているそれらの書は周りのみごとな調和をなしている。北京から約300キ

山海関の矢倉と横額

関一第下天



口離れた古代長城の東端である山海関はその城門のやぐらが1381年に建てられたものである。やぐらからは、東の海と関の内外の壮麗な山々を眺めることができる。このやぐらには一枚の扁額が掲げられている。その“天下第一関”の五つの雄渾有力な書はその場所が壮美な景観と呈するにふさわしいことを示している。それは明代の書道名家肖顔の手によるとのことである。

山東省の名所泰山を旅する際、是非その中路の東側にある龍泉峰に行き有名な“經石峪摩崖刻石”——1400年前に峡谷の6000平方メートルの石坪に彫られた『金剛經』——をみるべきである。“經石峪摩崖刻石”もとは3017字あったが、長年の風化のため、現在の1067字になった。全ての漢字でも約35平方センチ以上があり、最大の漢字はほぼ50平方センチにのぼる。周囲に山が重なり合い、傍らに谷川が迂回していく石坪には、なんとこのように雄大な有力な立派な艶やかな書道奇観を作り上げる者がいたとその発想の巧妙と技芸の完璧に驚かれてしまう。

南の浙江省の紹興に行く際、ガイドが町の西南郊外にある中国の第一の書道聖地——蘭亭を案内してくれるであろう。紀元353年、ある清清しく晴れ渡る春の日に、後に“書聖”と呼ばれる王羲之は41人の名士を誘い、この繁々たる竹林に囲まれ、両側を流れる清らかな激流に映える蘭亭に集まり、酒を飲んで詩を作る



『泰山經石峪の金剛經』
(部分) 南北朝

活時帶左右以爲清觴曲水
列坐其次雖無絲竹管弦之
盛一觴一詠一足以暢叙幽情
是日也天朗氣清惠風和暢仰
觀宇宙之大俯察品類之盛
所以遊目騁懷足以極視聽之
娛信可樂也夫人之相與俯仰

神品

趙

神品

神品

神品

神品

神品

神品

神品

神品

神品

神品

神品

神品

神品

神品

神品

神品

神品

神品

永和九年歲在癸丑暮春之初會

于會稽山陰之蘭亭脩契事

也羣賢畢至少長咸集此地

神品

神品

神品

有崇山峻嶺茂林脩竹又有清流激

王羲之行書『蘭亭序』
の最後の部分 晋代

ことにした。主人である王羲之は興に乗って324字にもなる「詩序」を書いた、『蘭亭序』と呼ばれるものである。(写真参照) 文章の基調は喜びの中に感慨をふくんだものであったが、この書の筆使いは滑らかで抑揚があり生き生きとして活気に溢れて変化に富んでいる。まさにリズムカルで叙情的な一曲にできあがったとい

えよう。後世の人々はこの作品を「天下第一の行書」と称えている。残念なのは原作が王羲之の崇拜者で書の達人唐代の二世皇帝—李世民の陪葬品とされてしまったことである。われわれが見られるのは後世の幾つかの模写の一つ—唐代の馮承素の模写なのである。

中国西部の古都である西安に一箇所の碑林がある。この碑林には漢代唐代の著名な碑石、墓誌、塔銘など、合計2000余りを集めた。中国でこの種の書道遺品を最も集中的に多量的に保存するところである。1087年に造りはじめた碑林は現在、陝西省博物館の1部になり、中国の国家重要文化財に指定されている。

書道には厳格な技芸規範と判定基準がある。書の技が作者の文化的教養、芸術的造詣、思想的情操などを表している。古今を通じて多くの書道の達人も画家、文学者、思想家、政





魯迅肖像



魯迅の行書手紙

近代中国の偉大な文学者、魯迅は有名な書道家でもあり、その独自の書体——「魯迅体」が自然で流暢なもので、人々に好かれている。

治家、学者だったりする。人々はある人の書道における成果を称賛する際、よくその人の他方面における業績に言及するのである。言いかえると、人々は書の上手さはその人自身の深い才能と学問の表れだと考えるのである。

書道は中国人にとって生涯において最も早くふれる芸術である。親や教師は子どもに字の読みを教えると同時に彼らに字を書く練習をも教える。目的は子ども達に覚えにくく書きにくい漢字を覚えさせるためである、同時に彼らの最初の美意識、芸術的判断力及び創造力の芽を植え付けるためでもある。それは子どもにとって生涯の財産なるであろう。

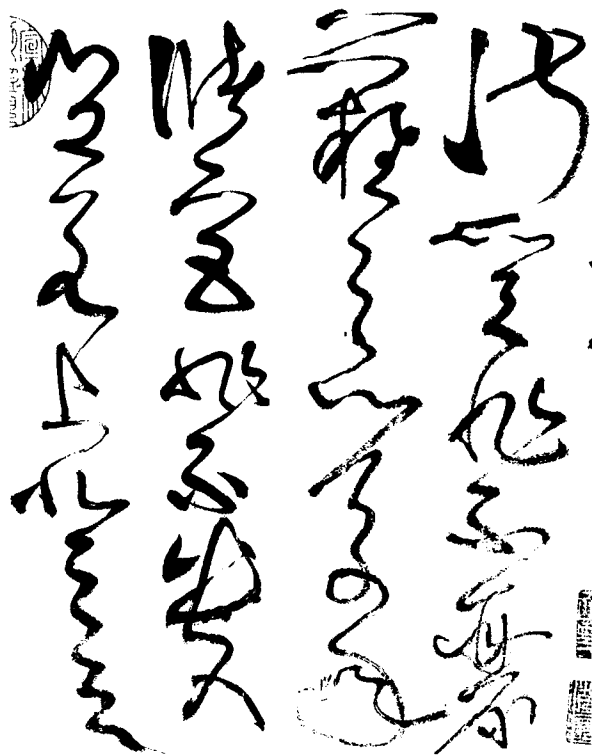
人々は書道が事物の映像を描かない絵画、音のない音楽、役者のいない舞踊、材料と構図の要らない建築だと称える。これらの称賛の言葉と比喻は人々が色々な上品な芸術を鑑賞するときに生まれた共通な感覚によるのである。書道はその線の形態と実質、組合せ、及び運筆などの方式で直感的かつ抽象的に色々な形式の要素——バランス感、均衡性、長短の変化、つながり、対比、静動の変化や調和など、故に書道が芸術中で中心的地位を占めている。各種の芸術は書道から啓発をうけることも多い。

書道は音楽と同じでリズムを主な要素としている。紙に表れた点画の太さ、丸み、速さ及び濃淡が明らかなリズム感を表す。それは、まるで音楽の絶えなく変化し運動している旋律のこどくであ

る。書道と音楽は作者（演奏者）の心の波動を表現する。つまり、古今の書道評論家たちは書道作品を論じるとき、「歌声が梁に響き渡る」とか「演奏名家の奏でた人を夢中にさせる一曲のごとく」と比喻するわけである。

書道は舞踊と同じで形式美と躍動感を表す。空間芸術と時間芸術の特徴を兼ね、相手の美しい姿から啓発を吸収する。唐代の草書大師張旭の書は奇異で幻のようでリズムカルである。彼は有名な舞踊家公孫氏の「剣器舞」を鑑賞するとき、深い理解と完成を持って、自分の芸術を発展させたそう

である。ここでの理解とは舞者のはっきりとしたリズム、優美な動作で表した活発、愉悦、悲哀、憤怒、期待、要求、豪邁、振奮などの色々な芸術的な趣を指す。張旭の草書と李白の詩歌、裴旻の剣舞は当時の皇帝に「三絶」と称賛された。『古詩四帖』は後世まで伝わってきた極めて稀な張旭の書の一つである。その書の中で上下の字の筆画がつながり、一つの字のようにみえたりする。連綿と



張旭狂草『古詩四帖』（部分） 唐代



斎白石『蝦』 水墨写意絵

続いて絶えなくあふれる感情が書に力強く表れている。

20世紀末に北京であるテレビ局が『墨舞』という題名の芸術番組を放映した。その番組でスクリーンに書道と舞踊を同時に映し、最初に一枚の書道作品を映し、その後には舞踊家が字の形と意味に沿って作り上げた舞踊を披露した。舞踊家のしなやかなステップ、腰の動きが、抑揚のある音楽とともに、観衆を導いた。舞踊が書道を解説し、書道も舞踊を解説し世界を広げた。

書道は水墨画と最も親密な関係である。両者は同じ道具——筆と画仙紙を使う、違いは書道が黒い墨のみ使うのに対し、絵が各種の色を使うという点であ

る。書と絵は多くの場合に一つの芸術として結びついている。書店では、書と水墨画が同じ棚に並んでいる。多くの展覧会は書と絵一緒に展示している。絵を描く者は常に絵の内容と関係のある詩や字を書くための空白を残し、趣を増すのである。もしその詩が画家自身の作品ならその作品の表情がもっと豊になるであろう。詩書絵の三者の結合点はこの種の豊かな境地、また「イメージ」ということである。かつて、詩書絵の達人は「三絶」の名人と呼ばれた。つまり、3種の絶

技を持つ人である。唐の時代から、このような達人が各時代に数多く現れたのである。

書道と絵は創作手法においてお互いに参考になるところが多い。絵が書道を参考にする視点から言うと、中国の伝統絵が書道の技巧、特にその抽象的な意味から示唆を受けなかったらその具像的な美を求める。中国の情趣に富む水墨画は草書の簡潔で放任、豪快な筆使いに学び創造されたものである。近代の著名な水墨画の大師齊白石の描いた蝦をご覧いただきたい。彼は濃淡な墨を持ち簡潔で鮮やかな筆使いを見せ水の中を泳ぐ何匹の生き物を描いた。絵の中に線で描いた水の波紋が見られないが、さらさらと流れる小川の水音、清しい水の香りがするようである。

書道は諸種の中国伝統芸術の中でこういう中核的な地位と役割が数学と各種の自然科学（物理、化学、地質、気候）との関係に比較できる。数学の理論は抽象的であるもの多いが、世界の空間認識や数学を深く反映するものである、故に教育で数学を重視するわけである。各分野の専門家は自身の深厚な数学基礎教養のもとに各自専門自然化学分野での探究を携わる以外ない。話がここまで進むと、私は2500年前に偉大な哲学者—老子の名言「玄之又玄，衆妙の門」（奥深いものの中で最も奥深いものは、いろいろな不思議なものを知る鍵である—訳者注）「道」は極めて深遠なもので、あらゆる優れたものへ通じる道である。ここで私はこの名言を借りて中国の書道を「玄之又玄，衆妙の門」とする。—中国書道の理論は極めて深遠で数多くの素晴らしい芸術への入口だと言えよう。